

第61号

令和3年
5月1日

題字
植木 満
初代東進会会長

東進

発行所

土浦一高東進会

〔茨城県立土浦一高〕
進修同窓会東京支部

発行人

東進会会長 飯塚 哲哉

事務局 〒102-0093 東京都千代田区平河町2-7-4 砂防会館別館6階
宮崎法律事務所 気付 東進会事務局
TEL (FAX) 03-5421-5321

E-mail : toshinkaisecretary@gmail.com ホームページ <https://to-shin-kai.jimdo.com>



提供 青木 功 (フォトグラファー 昭和50年卒)

■ 『パンデミックの中で想うこと』
平野 国美(昭和58年卒)

■ 第19回アカンサスクラブ講演録
『ウソとシアワセ』
五十嵐 朝青(平成6年卒)

■ 第20回アカンサスクラブ講演録
『医学を基礎とするまちづくり
(Medicine-Based Town)』
遊佐 敏彦(平成9年卒)

■ 特別寄稿 『アートは不要不急??』
山中 宣明(昭和46年卒)

■ リレー放談 第11回
『集う・群れる』
廣瀬 巳良(昭和40年卒)

■ **令和3年度**
通常総会はオンライン会議で開催!

「パンデミックの中で想うこと」

平野 国美(昭和58年卒)

新型コロナウイルス感染症の中、私共のクリニック、介護施設も手痛い洗礼を受けております。発熱を伴い疑われる患者さん宅には、防御服、マスクを装備して診察に向かう日々が続きます。2020年冬に始まった新型コロナウイルス感染症は歴史に刻まれるでしょうし、その後の社会システムを変容させる契機となるでしょう。

私共は訪問診療を行っていることもあり、高齢者のコロナ感染に関しては、自宅や施設での看取りも検討しては、という提案も頂きましたが、いくつかの理由で、まだ、この体制を敷いておりません。理由は、患者さん達が高齢で認知症があり、徘徊してしまい入居者や御家族との隔離が困難なのです。しかし、最大の理由は、このウイルスの生物学的な脅威というよりも社会的な脅威でしょう。コロナは人と人を断絶し、コミュニティを破壊しました。また死生観に関しても患者さん、御家族に影響が及んでおり、「高齢でもあり、いつかその日が来るのは覚悟をしています。延命も望んでいない。しかし、コロナで亡くなるのだけは嫌だ。」という意見は多いのです。新型コロナウイルスに感染すると面会は謝絶、葬式も十分に行えず玄関先に骨壺を置かれて

いくという報道に、死後も差別の対象となる状況は避けたいと思うのは当然でしょう。医療者も当然、自分が感染すれば差別や風評被害によって経営悪化、最悪は生命の危機となります。ウイルス自体の怖さよりも人為的に造り出される社会的な恐怖の方が問題であると思います。ネットが発達した時代に医師も政治家も立派な発言が目立ちますが、この騒動の最前線で働いている方は逆に発言を控えているのではないのでしょうか？むしろ、外野や評論家、自称専門家が多すぎて、逆に混乱を招いているような気さえします。私も週刊誌でインタビュー記事を書いており、その一人になっている可能性はあります。

この状態が、いつまで、続くのか？他国の報告をみて、ワクチンに希望を見出しております。これによって指定感染症の二類が外れば、状況は変わると思いますが、既に心に刷り込まれた恐怖は簡単には解けないでしょう。また、どれだけ医師が、このワクチン接種に参加するのかわかりません。現に行政からは担い手がいなくて困っているという相談も出ております。歴史的な惨事は、その後の社会の形態を変えております。この災いは、この国の医療体制のパンドラの箱を開けるのかも知れません。有事の際に、国が医療従事者をどこまでコントロールできるか、職業選

択の自由はもちろん、働き方や場所も今は、自由が認められております。二十年程前、中国からの大学院生に専門の選択の理由を尋ねた時に、「その選択権は、自分たちにはなく、国家の支配下にある」との事でした。「自分が小児科を望んでいなくても、上からの命令で、それを選択するしかない」と。それが本当なのか？今も、その体制なのかは知る由もないのですが、日本ほどの自由はないでしょう。自分が政治家であれば、この部分に手をつけようとするでしょうし、医学部の学生であるとしたら、その流れに大反対をするでしょう。しかし、平穩時はともかく、有事に際しての医師の在り方は、ボランティアの精神だけでは補えない問題が発生するのです。

かつて、ペストによる暗黒の歴史がありました。しかし、解説書を読むとその後の農奴解放から産業革命の幕開けに繋がっております。今回の騒動も、後に振り返って、あれが良かったのだと思える時代が来るのでしょうか。このコロナ下にある外出等の自粛規制の中、自分もある作品を読んでみました。それは、『ペスト』(原題: A Journal of the Plague Year) は1722年に発行されたダニエル・デフォーの作品です。書き出しは、以下の部分です。

それは確か一六六四年の九月初旬

の事であったと思う。隣近所の人達と世間話をしていた際に、私はふと、ペストが、また、オランダで流行りだしたという噂を耳にした。——当時、まだ、新聞などという、いろいろな事件についての風説や報道を伝える印刷物はなかった。まして、その後、長生きをしたおかげで私も実際に見てきたような、嘘八百を並べたてては風説や報道を、いつそう煽りたてようといった、ああいったものはなかったのがある。しかし、こういう、いろいろな情報は外国と取引をしている貿易商や、その他の人々の手紙から情報が蒐集され、口伝えによって広まってゆくのだった。したがって、今日のように一瞬の間に全国民に広がるということとはなかったのである。

読み始めると、今も昔も感染防御と経済活動のせめぎあい描かれていきます。そこにある問題は感染症による医学的な脅威ではなく、最大の脅威はエゴや道徳観の欠如にある事が記されています。この作品を読むと時代は変わり、医科学が進歩し、時代による個人の価値観が変遷しても問題の根本は同じなのだ気づかされます。そして、この表紙の鳥の嘴型のマスクを装着したペスト医の姿は今の私の貧弱な防御服とマスク姿を想起します。

そして、今、この感染症は、この国の体制の不備を次々と指摘してい

くようです。評論家が多すぎて、実務に携わるプレイヤーを嘲笑う醜い事態が起きているのです。作品『ペスト』に書かれている口伝の噂や新聞などを、はるかに超えるスピードと破壊力を持ったネットは邪魔でしかありません。

こんな中、私が受けた講義で、今回の事を示唆し、暗示しているものがあります。それを、御紹介しましょう。研修医として5年目の夏、結核学会が札幌で行われ、羽田から飛び立とうとしていました。席を確認して座ろうとすると隣席の老紳士に私は反射的に頭を下げました。

「橋本(達一郎)先生では、ありませんか？」と声をおかけすると「ごめんなさい、年のせいか記憶がね。」

「私は筑波大の卒業生ですが、先生の記憶に残るような者ではありません。ただ、入試の時の面接官が先生でして、その後、入学して、先生が今のBCGワクチンを開発された事を講義でお聞きし、感銘を受けました。後に、先生が医学群長になられました。私は、その年留年をしてしまったわけ。すみません。」と答えると

「そうなの、君は、これから、どちらへ？」私は手に持った観光案内を鞆に隠して、「札幌で学会なのです。」

「ひよつとして、これかな？」先生の手には結核学会の抄録がありました。

「君は、結核が専門なの？結構なことでですね。」決して専門ではないのですが、曖昧な私の領きが、札幌まで結核ワクチン開発の歴史が講義としてマンツーマンで開始されたのです。

「有効性が確立された結核ワクチンを、どのようなにして、この国の隅々まで安定した状態でデリバリーするかという問題に当時、直面していたわけ。ここで、私が、選択した方法は何かわかる？」私は即答で

「フリーズドライ(凍結乾燥)！」

「よく、覚えているね！」先生、すみません、この授業の場面は昔、ネスカフェのCMで、このフリーズドライがキーワードになっていたのです。自分には記憶し易かったです。そして、機内での一連の講義が終わり、

「君は、研修が終わったら、どうするの？」

「来年は大学院へ、そして、いずれは、地元で開業医になろうと思いません。」先生は、首を横に振り

「なぜ、留学しないの？なぜ、世界で働かないの？」

「自分に、そういう能力はなさそうです。」そこから、講義というか説教が再開されたのです。

「もつと、うちの卒業生も、海外で働いてはどうかと思う。それから、腫瘍や脳神経に目を向けて、感染症を蔑ろにする傾向があると思うのだよ。」確かに、その頃、私も現代医学は感染症をコントロールしていると錯覚していたのです。

「私は筑波大を退官し、海外に渡り、結核ワクチンの普及のため各地でプラントの立ち上げに参加した。」数年後、先生の御自宅を訪問した際に、多くの海外からの感謝状や民芸品が所狭しと並んでおり、それが先生の業績の証と察しました。

「現地において、私が直面した問題はフリーズドライによるワクチンの安定化よりも困難を究めた。相手国の国民性、識字率、どうやって、ジヤングルの奥地に住む、病が呪いや悪魔の祟りと考えている人々に、感染や免疫という事象を理解させ、ワクチン接種の意味を理解していただくか、そして接種を行うか？ワクチンの開発生産よりもこれが、最大の難関だった。これらの手法は、医学書には解説されていないこと。定年してから、こんな試練があるとは思わなかった。

しかし、各国の政府との折衝などは本当に、いい経験だったよ。この事業は相互の理解と信頼によって進めなくてはならない。感染症学が過去の学問と思ったら大間違いだよ。これからは、未知のウイルスも出て来る筈だからね。遺伝子の解析だけでは解決できない問題がそこにあるのだよ。そこには、文化人類学や民俗学的なものも存在する。単一民族

の中央集権国家である日本で行った経験は苦勞の類ではないと思つたね。だから、もつと、感染症学に進む学生が増えて、政治や他分野とのネゴシエーションスキルを磨かなくてはならない。だから、世界を見てきたらどうだい。なぜ、WHOを目指さない。」

それから、四半世紀が過ぎました。能力的に橋本先生の教えに従えなかった私は、貧弱な感染防御服とマスクを命綱に祈る思いで患者宅に入つてゆくのです。今、眼の前にある悪夢は先生の予言のようです。自称、感染症の専門家は多く存在します。しかし、先生の言葉の前には、それは知識の断片でしかないのです。これを解決できるには民俗学や政治、宗教など他分野と、どれだけ調整ができるか？同じ国民であっても背景や文化が異なる事を理解した上での行動、意思決定などが行えるか？

これがかつて経験された方となると尾身先生しかいないのではないかとと思うのです。しかし、御本人は、おそらく、これまで、海外でのポリオやパンデミック以上に困難な事例とお考えなのではないかと思うのです。その原因は、ウイルスの特性でなく、現代、日本人の在り方ではないかと思うのです。おそらく、扱いにくいなと呟いているのではないのでしょうか？

第19回アカンサスクラブ講演録

『ウソとシアワセ』

五十嵐 朝青(平成6年卒)

【幸せの3つの条件】

皆さんが幸せを感じるのとはどんな時でしょうか？また、皆さんにとっての幸せの条件とは？私は区長になるにあたって、まずはその問いに対する答えが必要だと考え「ウェルビーイング」の専門家と長時間の議論をしました。その結果、幸せの条件は

- ・平日の日中にテニスができること
- ・の中に集約されるという結論にいたりました。
- では、「平日の日中にテニスができる」という中にどんな条件が隠されているのでしょうか？それは以下の3要素です。
- ・健康であること
- ・良い仲間がいること(良い人間関係があること)
- ・可処分時間が確保されていること
- (暇なこと) です。

【幸せの3要素に影響するファクターは？】

昨今幸福度に関する実験結果も多クシェアされていますが、私が千代田区の諸課題に対しての、最も根本的な解決策の一つとして捉えたのが、

・地域のつながりの再構築です。特に都会はマンションが多く(千代田区は95%以上の区民が集合住宅に住んでいる)長年近所に住んでいよ

うが、同じマンションに住んでいよ
うが、同じ屋根の下にいよすが、壁
一枚隔てたところにいよすが、顔も
名前もわからないということが多い
のが現実です。もつたない！特に
東京に住んでいる皆さんは、同じマ
ンションにどれくらいお知り合いが
いるか、特に困った時に助け合える
関係の方が何人くらいいるか、少し
考えていただけたいと思います。例
えば災害時にインフラが機能不全に
陥った時に、助け合うことができる
人がいるか？

アベノマスクも同じマンション内
で互助のコミュニティが出来ていれ
ば、あの500億円とも言われる歳
出はもつと必要などころに使えてい
たのではないのでしょうか。子育ても
同じマンション(同じ屋根の下)の
知り合いの老夫婦に少し子供を預か
っておいてもらう代わりに、その老
夫婦のための買い物もしてくるなど、
雨に濡れずに大家族的なつながりが
あれば、随分と暮らしの自由度が上
がります。

最近が増えて来ましたが、車も所
有せずにシェアすることで費用負担
も減ります。日本では自家用車の平
均稼働率は、4%程度だといわれ、
東京に限定すると週末利用だけの方
も多く実際に車を利用して時間
は1%程度ではないでしょうか。し
がらまずに、ゆるやかにつながれる
助け合い、支え合いのコミュニティ
の再構築が、多くの問題を解決する

ことだと信じ、都会の良い事例がで
きないか模索中です。

【ルールチェンジャーになろう！】

10年前の震災時もそうでしたが、
コロナ禍でも日本人は総じてルール
を守ることに關して、とても真面目
でその能力は世界でも類を見ないも
のです。「自粛要請」という法的根拠
のない不思議な言葉も受け入れて行
動する。お上文化の強い日本ならで
はかもしれませんが、これが逆にル
ールを作るといふ点では弱い印象で
す。

古い例ですが、水泳の鈴木大地選
手がバサロスタートで金メダルを取
ると、バサロを15mまでとルール変
更されて勝てなくなる。スキーのノ
ルディック複合で萩原兄弟がジャン
プでの加点を活かして逃げ切るとい
う必勝パターンを確立すると、ジャ
ンプの加点を減らされる。ルールに
従っていた方が安全、みんなと一緒
なら大丈夫という精神性が、思考停
止を産み、イノベーションが起こら
ない。

政治というルールを作る側に対し
ても、「拗らしむべし、知らしむべか
らず」、で為政者にとって都合の良い
状態になっているのかもしれない。
私が、どうして千代田区長に？と聞
かれたら、一つの理由は

・ルールを変える側に皆さんと一緒に
に行きたいからです。

【すべては虚構(ウソ)】
ユヴァル・ノア・ハラリが「サピ

エンス全史」でも書いているように、
国家も企業もお金も時間も家族もル
ールも年齢も名前も、私たちが頭
中で作っているフィクション(ウソ)
でしかありません。私たちが卒業し
た土浦一高も校舎は物理的に存在し
ますが、概念的な意味ではフィクシ
ョンです。すべてはただの

・思い込みでしかないので、
みんながそれを思い込むことでこの
世界は成り立っている。では国家は
なんのために存在するのか？企業
は？お金は？家族は？思い込みでし
かないこのようなものを、絶対的な
ものだと思わせることで得している
人たちは一体誰なのか？そんな問い
が、私たちの人生をもつと自由に豊
かにするきっかけになるのかもしれ
ません。

コロナで人類は立ち止まり、絶対
と想っていたものについて考え直す
チャンスを得ました。会社に行かず
とも働けることを知り、プレイスフ
リーな時代が来ました。と、ともに
当たり前前に享受していた物理的な接
触の価値も改めて知るところとなり
ました。

・3密の中に私たちの幸せはある

私たちは皆、濃厚接触を通して生ま
れ、濃厚接触の中で育ち、濃厚接触
の中で助け合いながら生きています。
メディアが作り出す「ウソ」に踊ら
されず、ファクトフルネスな選択を
していききたいと改めて願います。

第20回アカンサスクラブ講演録 『医学を基礎とするまちづくり (Medicine-Based Town)』

遊佐 敏彦(平成9年卒)

「MBTとは」

医学を基礎とするまちづくりとは、医学的知見をまちづくりに積極的に応用することにより、まちづくり自体を大きく変革しようとする概念をいう。「Medicine-Based Town」の頭文字を取って、MBTと呼ばれている。

「奈良県立医科大学とMBT構想」

奈良県立医科大学では、大学の将来像の一つとして、産学官民連携のMBT構想による安心のまちづくりを位置付けている。さらには、2024年までに大学の教育・研究部門を段階的に近隣の土地に移転させる計画がある。移転に合わせて、医大の機能を重要伝統的建造物群保存地区である今井町に一部移して、連携したまちづくりを始めている。そしてこの連携から得られた知見を移転計画にも活かしていこうと構想している。

「産学官連携の取り組み：都市公園における医学分野と連携した新たな活用可能性調査(国交省助成事業)」

密を避けつつ、公園の利用を促し、屋外の活動を活発にする産学官民連携(檀原市、奈良医大、民間企業等)の事業を行っている。スマートウォッチを活用したソフ

トウェアの開発なども含め現在は実証実験中だが、こういった事業が実現できれば、より連携の進んだまちづくりができると思われる。

「今井町における空き家改修、健康増進活動等による地域連携」

伝統的な街並みが残る今井町と奈良県立医科大学が連携して、第一弾の事業として海外から来る研修医や研究者向けのゲストハウスを空き町家を活用してつくった。建物の所有者の協力を得て、文化庁からの補助金も活用しながら、施設を改修し、2017年に完成した。

また、空き室を利用した地域住民向けの健康体験行事なども行っており、大学と住民のふれあいによる地域貢献を実践している。さらにはソフト面の活動として、地域包括ケアの拠点として健康教室・健康測定等の介護予防事業を2018年より実施している。檀原市が整備した町家を利用した健康教室では、理学療法士の指導のもと月2回程度の頻度で健康体操や健康測定などを行っている。参加者からは外出や頻度、近所づきあいの頻度などに変化があったとの回答があった。

他にも認知症予防に効果が高いとされる音楽療法のワークショップも実施し、認知機能が向上するか検証を行っている。結果として、即時的な記憶力の向上が見られ、認知症予防に一定程度の効果があることが分かった。また、この活動により、気

軽に楽しく健康の見える化が行えたり、住民同士の出会いやつながりの強化を図ったりすることができている。

これらの活動は、最初は大学が主体に行っていくが、徐々に地域住民に活動のバトンを渡していくことを目指している。今は、地域と伴走をしている段階である。

今後、今井町での取組をマニュアル化して他の地区に広げたり、地域の潜在看護師なども巻き込んだりするなど地域住民の健康増進を図っていくことを計画している。

コロナ禍において、独居高齢者の見守りなど、これまで問題とされた対策を先送りにされてきた傾向のある課題について、取り組む契機となった。

(写真上) 重要伝統的建造物群保存地区「今井町」で改修した大学のゲストハウス(写真下)今井町の空き家を改修した貸しスペースで運営する「健康教室」



まちづくり会社で運営している
若者向けのシェアハウス

○まちづくり会社

「一般社団法人 do-maj」

町家の活用について相談から取引、施工まで一貫通貫に行うまちづくり会社を2年前に立ち上げた。これは、早稲田大学と本学および地域の建築士らとの共同研究の中から始まったものである。

小さな町家はカフェや住宅に活用されてきたが、大型のものは活用が進んでいなかった。

第一弾として、町家をリノベーションし、若者をターゲットにしたシェアハウス「1977 JOL」を2020年春にオープンさせた。

シェアハウスによって、地域の近隣住民との多世代交流や見守りを促進することを意図している。将来的には、健康教室など様々な事業を含め、地域住民と医療介護専門職の人々との交流を促進し、健康・運動・食育を軸に次世代コミュニティを醸成し、健康寿命を延伸すことを目指している。

特別寄稿

『アートは不要不急??』

山中 宣明(昭和46年卒)

まず自己紹介をさせていただきます。同期で残念ながら早逝したシャノン歌手の蛭原芳和(海老原順)さんのお誘いで、何度か東進会懇親会に出席させていただきました。2004年に二科展で内閣総理大臣賞を受賞し、つくば市での祝賀パーティーを開いていただいた際には、大野金一会長はじめ、東京からもご来賓としてご出席いただきましたのも忘れられない思い出です。この度は同期で幹事の小野幹夫さんより東進会会報に拙文を寄稿させていただきました機会を得ましたので、画家としてのコロナ下での活動の状況や想いをご報告したいと思います。

私の所属している二科会は、コロナ感染が報道されて以来、昨年度は春季二科展、二科茨城支部展、例年約10万人の観客を迎えている9月の二科展は中止を余儀なくされ、本年の春季二科展も、2年連続で中止を決定しました。開催の是非を決める会議も開催できず、リモートや通信によって検討した上での残念な結果でした。今年の国立新美術館での二科展は、105回記念展にあたるため何とか開催の方向で準備を進めております。

自粛期間の中、6月銀座、9月六本木、11月にはつくば美術館で個展を開催、今年に入ってから1月に銀座、2月帝国ホテル、4月には「コロナ下でも活動を続けた作家展」という評論家の企画展も出品しました。大型公募団体展や国や県の美術館の企画展は基本的に自粛宣言に伴うガイドランスに沿い、軒並み中止か、開催しても入場制限や感染防止をし、パーティーやギャラリートークなどのイベントは自粛し、他業種と同様大変厳しい状況です。また、銀座等の画廊は展覧会の中止や延期を望む作家も多く、美術館以上にダメージが大きく、閉廊を余儀なくされる画廊も多い状況が続いております。公的な展覧会も私的な展覧会も、刻々と変わる感染状況を見据えながら、大変難しい開催の是非の選択を迫られています。

二科展などに関しては全国規模のため、地方在住の会員も多く審査などが困難であること、出品者減が見込まれ、何にもまして観客の安全を優先させる、という考えで中止を余儀なくされました。地方在住者と首都圏の会員では、コロナに対する警戒度にもかなり温度差がありました。首都圏から離れた距離と比例して、コロナ感染に対する警戒度は高かったです。

私個人の展覧会に関しては、コロナ以前に予定・企画されていた個展やグループ展はすべて実施いたしま

した。実施を決意した主な理由は、決してコロナと敢えて戦うとか、停滞する美術界を活性化したい、というような大上段に構えた考えではありません。

コロナ下でも職業作家の仕事として、「ステイアトリエ」で粛々と制作し、発表を続けたいという想いがあります。また美術館や画廊が厳しい状況の中で、SNS発信、ライブ発信など様々な発信手段をし、作家の応援をし、なんとかこの苦境を乗り越えようとする姿を見て、作家側(自分)から中止を申し入れる、という選択はありませんでした。検温や消毒などの安全対策を取りながら、なんとか無事に開催できたというのが実情です。

今回のコロナで芸術活動の存在意義について、いろいろと考えさせられました。アートは非常時に必要か? コンビニやスーパーはなくなってしまうえば、その日のうちに困る死活問題です。美術展は中止になっても生活に直接打撃を与えることはなく、困ることはないかもしれません。しかし、美術に関わる仕事をしている私には、展覧会を開いたり見たり、制作したり画材店に行ったりすることは、決して(不要不急)のことはないのです。マスク姿で熱心に展覧会を鑑賞する人々をみて、人間は絵や音楽に感動したりすることが、人生にとって必要不可欠なものであると痛感しました。

先行きは不透明でコロナの終息を迎えたとしても、海外文化交流も含めて美術界に与えた影響は後遺症を残すでしょう。しかしながら得たものもあります。コロナによって人間に本来に必要なものは何か、経済の豊かさとともに芸術による精神生活の豊かさも大切であることを再認識された期間であると思います。

この原稿を執筆中に、美術館は緊急事態宣言により休館になりましたが9月の二科展や個展に向けて前を向いて準備に励んでおります。展覧会のご案内に「決してご無理をなさらないでください」と記述しなければならぬコロナ状況が一日も早く終息し、「ぜひご覧下さい」と書ける日が来ることを祈りながら。



2020年 11月 つくば美術館個展会場にて

第11回リレー放談

『集う・群れる』

廣瀬 巳良(昭和40年卒)

私は昭和21年(1946年)生まれ74歳。定年退職後14年になる。1973年から世田谷区若林在住。趣味はと問われれば、お酒との戯れ、ハイキング、国内海外旅行と答える。楽しい時間や感情を仲間と友にすることで、一人では味わえない喜びを得て、思い出を刻んでいる。私が繰り返し参加している集いを紹介させて頂き自身を振り返ってみたい。

〈謳粋会〉

東進会の中に「銘酒を愛でながらその季節料理を楽しむ」目的で1998年9月発足した。途切れることなく毎月第二木曜日に開催され、2020年2月第258回(写真右下)を数えた。私は第100回から参加している。謳粋会幹事が推薦したお店を開催場所とし、時には日帰りや宿泊で旅することもある。お店は和食中心だが、中華、イタリアン、フレンチなどと多彩である。ほぼ皆勤の参加者もいて和やかな時間が流れる。2月の「第258回謳粋会の記」に次回第259回謳粋会は令和2年3月12日(木)と告知したが、コロナ禍で中断している。コロナ禍が落ち着き、その再開を待っている。「東進」を読んでくださる皆さんも是非参加してください。



〈とんとの会〉

サラリーマン時代は情報システム部門を中心に管理部門に勤務し、毎日残業の勤務が常態化していた。酒の好きな連中との夕食は決って居酒屋となった。その仲間と新年会、花見、暑気払い、ボジョレーヌーボ、忘年会と飲み会を催事化した。2000年を迎えた頃「チーム呑兵衛」と名前も付けた。名前があまりにも的確な表現なので、数年後飲み会中心の集まりをスペイン語堪能な仲間が「とんとの会(Tonto)」と名付けた。コロナ禍で中断しているが、15名の仲間と年に6回以上開催している。飲み会以外に2000年からハイキングを「散策の会」と称して2019年までに40回開催している。出来るだけ楽に素晴らしい景色をと(ロープウェイで登る山・木曾駒ヶ岳・御嶽山・安達太良山・御岳山・茶臼岳・谷川岳・北八ヶ岳など)、ま

た山小屋で宴会をと(箱入りワインを歩荷・苗場山荘・加仁湯・尾瀬小屋・至仏山荘・三斗小屋・西穂高山荘・雲取山荘・みくりが池温泉・頂上木曾小屋・大島温泉・くろがね小屋・石室山荘・双子池ヒュッテなど)出かけた。

私と同年代4名が定年後「春秋会」と称して2008年から花見・紅葉狩りに出かけた。同じ仲間と2013年春の京都桜巡りに合わせて西国三十三観音巡りを始め、続いて板東三十三観音巡り、そして秩父三十四観音巡りをしている。西国・板東は巡り終え、秩父が2019年秋で中断し百観音満願まであと二日残している。タイに数十回出かけている仲間が企画し2020年2月11名でバロンコク・チェンマイ7日間個人旅行(写真左)を開催した。昼食・夕食に加え部屋での宴が毎日続いた。コロナ禍のため飲み会が開けないので、昨年10月より毎月第四火曜日19時30分からZOOMとんとの会を3時間開催している。



〈信州を愛する会〉

勤務時代の研修会で知り合った仲間が年1回集まり、懇親会を続けていた。その中の5名で始めた「信州を愛する会」がある。同じ会社の仲間はいない。仲間の一人が佐久に持つていた別荘に浦安から転居永住し近くを案内してくれたことに始まる。佐久平に集合し、仲間の車で乗鞍・新穂高、立山、黒斑山、仙丈ヶ岳、尾瀬、軽井沢、海野宿、別所温泉、美ヶ原高原などに出かけた。2013年2月には、5名で13日間ネパールアンナプルナトレッキングに、2019年9月には、4名で10日間イタリアドロミテハイキングに出かけた。皆高齢者でそれぞれ別の仲間とゴルフ、テニスなどを楽しんでいる。この仲間は余り酒を吞まず集う以外群れない。

〈町内会・酒楽会〉

私の実家はつくば市北条にある。2007年3月の退職から高齢な両親のサポートに、毎月第一金・土・日・月に北条に向いた。町内の面々とは四十数年疎遠になっていたが、誘われるまま2008年から町内会、北条街づくり振興会、会員10名で毎月開催される「酒楽会」に参加した。町内会では、葬儀・祭礼役員も引き受けた。

竜巻が2012年5月6日午後12時30分頃北条地区商店街を直撃し、死者1名のほか、家屋の被害や電柱の倒壊など激甚な災害がもたらされ

た。139棟が全壊し、我が実家と同じ大規模半壊は36棟となった。竜巻の時、両親はすでに他界し、私が「酒楽会」「振興会ボランティア」参加時以外は空き家であった。6日は春秋会仲間と東北桜巡りで鳴子峡にいた。竜巻の一報は午後3時頃、隣の酒屋のご主人から携帯電話にあった。また別の酒楽会仲間が北条宅の状況を確認し連絡してくれた。南面のガラスが全部割れ、屋根瓦がかなり吹き飛んでいた。電柱が倒れ、道を塞ぎ停電になっていた。鳴子にいた私は、翌日7日、北条に行くことにしたが東京駅に着いたのは午後3時を廻っていた。北条に向っても夜になるので8日にした。6日の夕方、千葉市で建築設計事務所を開いている大学の同窓に連絡して助けを乞うた。7日、現場を見に行ってくれ、水戸の工務店に応急処置を手配してくれていた。私が北条に到着した8日には、屋根にブルーシートが張られ、割れた窓はベニアでふさがれた。発電機電源が準備され、大型掃除機が稼働し、部屋に散乱したガラス、ガラス片を片付けてくれていた。

北条宅は取り壊し、千葉の同窓に設計施工を依頼し、再建した。「謳絆会」「とんとの会」「信州を愛する会」「酒楽会」を始め、多くの仲間が再建した家に集まり、散策や宴を楽しんでいる。その数は50回を数える。次回のリレー放談は、同期の池和田暁さんをお願いした。

令和3年度 通常総会はオンライン会議で開催

今年度も昨年度に引き続きオンラインにて通常総会を開催します。

日時：	6月20日（日）午後1時から2時半（予定）	
内容：	来賓挨拶	中澤齊土浦一高校長、大野金一進修同窓会会長
	総会審議	決算報告・予算承認
	講演	「スポーツとジェンダー」 江橋よしのり（平成3年卒） FIFA女子ワールドカップ解説者

審議事項につきましては、同封の資料（予算決算）をご確認いただき、オンライン会議への参加、または書面表決手続きによる決議のどちらかを選択して、返信用封筒にて6月13日までにご回答下さい。また、今年度の東進会年会費3,000円につきましても、随時受け付け中ですが、できれば6月末日までに、同封の振込用紙にてお振込み下さい。今後の東進会活動を維持していくためにも、引き続き年会費納入にご理解下さいますようお願い申し上げます。

【編集後記】

4月25日、4都府県に、3度目の緊急事態宣言が発令されました。コロナウイルスと共存していかにかにうまく生きていくか、人間とウイルスの戦いがさらに続きます。

来年卒寿を迎える母は、阿見で一人暮らしをしています。「他家を訪ねてはいけない」「一緒に飲み食いをしてはいけない」、と行動を制限されているので、「二日に一度も誰とも話をしない」ので、毎日が憂鬱になってしま、体よりも心が病気になるそうだと嘆いています。近所の人からは、「常磐線に乗って、東京へ行かないでくれ」「東京からコロナを運んで来ないでくれ」と言われているので、私にも「絶対に来ないでほしい」と言っています。コロナよりも、周囲の目の方が怖くてたまらないそうです。

オーストラリアで暮らす次女とは、もう一年半以上も会っていません。オンラインで、近況を聞いているので、特に心配はありませんが、やはり対面で話ができる日を心待ちにしています。ITには疎い私ですが、コロナ禍だからこそできることを考えて、暮らしていければと思っています。

5月からは徐々にワクチン接種が始まるようですが、皆様もコロナに負けないで、どうぞお元気でお過ごし下さい。オンライン総会で皆様にお会いできるのを楽しみにしております。(H)